

岡村 恵子

キュレーター／東京都写真美術館 学芸員

## トヨタ コレオグラフィーアワード2014・選評

限られた時間の中でのグループ討議による審査は、プレイ時間の決まったスポーツにも似て、今回は延長戦にまでもつれ込んだ末に、PK 戦を繰り返すという体ではあったが、しかし、最終的に引き分けはなしというのがルールであったからには、ホイッスルがなるまでにはむろんあらゆる可能性があったけれども、結果はひとつ。不条理かもしれないが、ファイナリストたちにとっても、審査員たちにとっても、それが全てだと思う。

少々時間も経ってしまったし、あまりにもバラエティに富んだラインナップただだけに、各ファイナリストについて、私が当日それぞれをどのように評価し感じたかについては、うまくこの場で表明できそうにない。また討議の論点や経過がどうだったかについても、事後的に詳らかにする立場にもないと思う。

私は、そもそも異なるフィールドからのゲスト審査員という枠であり、ファイナリスト選考に関わった専門家の皆さんとは、自ずとはじめから立ち位置が違った。数多ある応募の中から、なぜ、どこをどう評価してこの6組がファイナリストに選ばれたかの議論については、細かなプレゼンテーションを受ける時間はなく、むしろそこは棚上げにして、応募資料と当日のパフォーマンスのみを、まずは評価の対象とすべしと考えて臨んだ。多彩なファイナリストたちには、それぞれの美学や志向、面白さがあり、評価軸もまた個別かつ多様であってよいはずだ。であるにも拘わらず無理やり暴力的に優劣を問うからには、便宜上とはいえ、各人に共通に与えられた規定（世田谷パブリックシアターのステージ、20分という時間、応募資料の形式等）の中でそれをどう使い表現としてぶつけてきているかを比較することが最もフェアだとも考えていた。与えられた機会に対して、自分なりに真摯に向き合ったつもりではあるが、「コンテンポラリー・ダンス」や「コレオグラフ」の過去・現在そしてこれからのについて、必要以上に背負うつもりも、またその余力もなかったというのが正直なところだ。

ただ、同時代の表現に何を求めるかという点においては、ジャンルの垣根を越えて自分なりの視点を持ち込めると思っていた。時に僭越な意見も述べさせていただいたが、それ以上に闊達な議論の応酬には終始大いに刺激を受けたし、日頃から真剣にダンスシーンを見守り、またその創造に関与してきた皆さんの見識に、自分では気づかなかった視点を次々と見出す豊かな時間だった。

態度を決めるのがとりわけ難しかったのは、「当日のパフォーマンスの優劣を問うのではない」「ダンサー賞ではなく振付賞」というような前提を、どう解釈するかであり、できるだけ客観

性を保とうと務めたけれども、やはり日頃の活動を自分の目で見知っていたかどうかということが、良くも悪くも判断に影響を及ぼした。具体的には、活動をリスペクトしているがゆえに積極的には推さなかった人もいるし、共感できるところが未だ少ないがゆえにむしろ好奇心と期待を寄せた人もある。タイムアップを前に、最後は、直感を頼りに下すしかなかった判断に、明確な正誤は問えないはずではあるが、ひとまずむこう10年ほどは、まがりなりにもこの審査に関わった責任を感じながら同時代のダンスを見ることになりそうだ。

2014/09/30